# 調　査　の　概　要

## 1　調査の目的

産科看護について，患者のニードに応じた看護サービスを行なっていくための基礎データとすることを目的とする。

調査にあたっては，特に次の点に焦点をあて，看護職が何らかの行動を起こしていくための示唆を得たいと考えた。

①患者と看護職の間の役割期待関係が成立する上で必要となる両者のコミュニケーションの現状をつかむこと。

②現状改善に大きな影響を与える看護チーム内のコミュニケーションのありようを把握すること。

## 2　調査計画の視点

### 1)　1対1の看護

患者・看護職関係について，島内節は患者から受容されることの少ない看護婦たちと多くの患者から深く受容される看護婦たちとのそれぞれに共通する特徴をつかんだ上でこう結論している[注1)]。

「(前略) 第5に，患者・看護婦間の相互受容関係は，接触頻度や時間の関数ではなく，両者のかかわりの性質による。(中略) 相互受容は患者・看護婦の両者又は一方が相手にかかわりたいという願望を持ち，自己開示的かかわり (冷静に客観的・分析的に患者に関わるのでなく，相手を理解しようと，熱心に関わる。引用者注) において実現されやすい。」

患者にしてみれば，自分に関心を持ってくれる看護職を信頼するのである。この「看護職と患者のかかわりの性質」に関して，斉藤育子は一歩進め，「患者・看護婦関係を発展させることができた事例に共通にみられる看護婦の対応としては，

(1)看護介入の過程で具体的に技術を展開し，患者自身が目的を達成することができた場合 (技術介入の効果)。

(2)患者の気持ちが看護婦に十分受けとめられたと，患者が感じられた場合 (患者の自己覚知)。

(3)看護婦の気持ちや感情を患者に十分伝えることができた場合 (交流関係成立)。

等が決定因であること」を確認している[注2)]。

看護職個人と患者個人の1対1の関係については，以上の島内と斉藤の指摘がきわめて説得力に富んでいるので，そのまま私たちの研究の視点とする。

### 2)　看護チームとしての看護

ところで，従来看護職・患者関係というと，看護のある場面，あるいは一連のプロセスレコードを素材として，1人の看護職と，1人の患者という1対1の関係をとりだして扱われることが多かった。この方法は，1人の看護職が考える筋道としては妥当なものであるが，立場をかえて，1人の患者にとっての看護職の関係を考えていくには十分とは思えない。

1人の患者にとっては，自分が関わる何人もの看護職全員つまり看護チームをはじめ，医師，事務員などの職員全体，すなわち，そこでの生活全体が問題なのである。

看護職と患者との1対1の関係の中で，十分な看護を行なうことと，看護チーム全体として十分な看護を行なうことははっきり境界線をひけるものではない。1対1の看護は独立しているようにみえても，実は看護チーム全体の看護の大きな影

響を受けている。また看護チーム全体の看護は，チーム員の1対1の看護と，いわゆるチームワークとリーダーシップと呼ばれるものの集積である。従って，1人の看護職が患者にとって十分な看護を行なおうとする時には，自分と患者との1対1の看護を十分にすること以上に，そのチームが全体として行なっている看護についても知り，関わっていくことが必要だろう。そこで，これを今回の調査のもう1つの視点とする。

注1）患者と看護婦の心理的構造の差異と患者＝看護婦関係―患者＝看護婦関係理解への一つの試み―，島内節，看護研究，1975年

2）看護婦の患者への対応に関する検討―患者＝看護婦関係成立の要因―，斉藤育子他，第11回日本看護学会集録，看護総合分科会，1981年

## 3　調査の方法

「施設における母子看護調査」は，看護職対象の調査と産婦対象の調査の2つから成っている。

**1）　産婦対象の調査**

昭和55年10月～12月に全国21施設(表3参照)において出産した産婦を対象に実施。調査票は産婦が退院するときに看護職から産婦に手渡す，あるいは産後の1か月健診の際に渡す等で配布し，記入後は産婦が看護協会調査研究部あてに郵送する方法をとった。

配　布　数　　2,088　　有効回収数　　1,080

回　収　率　51.7%

**2）　看護職対象の調査**

①　助産婦調査

看護協会に加入している助産婦を次のように無作為に抽出し，昭和55年7月～8月に実施。通信自計式。

・抽出方法

精度0.015の時の必要標本数を算出する次の公式

$$n=\frac{N}{\frac{(N-1)\times 0.015^2\times \bar{x}^2}{4\times \sigma^2}+1}$$

に，母集団である本会会員助産婦に関する次のデータを代入した。

会員助産婦全数　N＝9,163（人）

平　均　年　齢　$\bar{x}$＝39.5（歳）

標　準　偏　差　$\sigma$＝11.5

必要標本数nは1,294票である。

回収率を50%と見込んで，調査票発送数は2,600票とし，抽出間隔3.5で抽出した。

有効回収数1,020，回収率39.2%。

②　施設の看護職対象の調査

1）の産婦が出産した21施設の産科系看護職全員に助産婦調査と同じ調査票で55年9月～11月に実施。通信自計式。

配　布　数　　361　　有効回収数　315

回　収　率　87.3%

また12月にはこれらの施設の産科系婦長に看護サービスの実態を問う簡単なアンケートを配布。

21施設中11施設より回答があった。

## 4　調査の集計

統計的に処理するものについてはコンピュータ使用。

## 5　調査の担当

日本看護協会普及開発部調査研究係職員が調査を実施し，報告書作成にあたっては次のように分担した。

看護職対象の調査　　安原紀美子

産婦対象の調査　　鶴田　薫

## 6 対象者と施設の特徴

調査対象者と施設の属性を簡単にみる。

**1) 産婦の属性**

T，U２つの助産所およびR，Sの母子健康センターの４つの施設とそれ以外の17病院とでは，施設の組織や看護体制等の条件が異なっており，それに伴って産婦の回答にも違いがみられる。そこで結果の分析にあたっては，助産所等（T助産所，U助産所，R母子健康センター，S母子健康センターの４施設を合わせた略称）と病院との比較も行なっていく。

産婦の属性は，「お産の仕方」と「第何子か」の２つからみる。

① お産の仕方

表１の通りである。全体にみると「自然のまま」が半数以上を占めている。助産所等では，これが８割をこえているが，身体が健康で自然のままの出産だけを扱う助産所等の特徴が現われているといえる。

一方，病院全体では「自然のまま」の産婦は５割以下となるが，病院を個別にみると，ラマーズ法等の呼吸法をとり入れて「自然のまま」がほとんどであるところもあれば，「麻酔による無痛分娩」という産婦が多いところもあり，病院間の差は大きい。

② 第何子か

今回のお産が「１人め」の子どもであるという人が，表２のように半数近い。

**2) 対象施設の特徴**

産婦が出産した21施設の属性を「設置主体」と「年間分娩件数」等によってみると表３のようになる。

**表１ お産のしかたはいかがでしたか**

| | 全体 | | 病院 | | 助産所等 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 自然のまま | 51.3% | 554人 | 46.3% | 431人 | 82.0% | 123人 |
| 陣痛促進剤使用 | 21.7 | 234 | 22.5 | 209 | 16.7 | 25 |
| 麻酔使用 | 9.1 | 98 | 10.5 | 98 | — | — |
| 帝王切開 | 7.4 | 80 | 8.6 | 80 | — | — |
| 吸引・かんし | 3.8 | 41 | 4.4 | 41 | — | — |
| その他 | 6.1 | 66 | 7.1 | 66 | — | — |
| 無回答 | 0.6 | 7 | 0.5 | 5 | 1.3 | 2 |
| 計 | 100.0 | 1,080 | 100.0 | 930 | 100.0 | 150 |

**表２ こんどの赤ちゃんは何人めのお子様ですか**

| | 全体 | | 病院 | | 助産所等 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1人め | 45.5% | 492人 | 46.2% | 430人 | 41.3% | 62人 |
| 2人め | 40.2 | 434 | 41.1 | 382 | 34.7 | 52 |
| 3人め以上 | 13.9 | 150 | 12.4 | 115 | 23.3 | 35 |
| 無回答 | 0.4 | 4 | 0.3 | 3 | 0.7 | 1 |
| 計 | 100.0 | 1,080 | 100.0 | 930 | 100.0 | 150 |

**表3　対象施設の特徴**

| | 設置主体 | 年間分娩件数 | 帝王切開 | 麻酔による無痛分娩 | 陣痛誘発促進剤の使用 |
|---|---|---|---|---|---|
| A 産院 | 県立 | 400～ 599件 | なし | なし | ～2割 |
| B 病院 | 国立（文） | 600～ 799 | | | |
| C 病院 | 市立 | 600～ 799 | 15% | ～8割 | ～8割 |
| D 病院 | 日赤 | 800～ 999 | ～1割 | なし | ～2割 |
| E 病院 | 県立 | 800～ 999 | ～1割 | なし | ～2割 |
| F 病院 | 社会保険 | 800～ 999 | ～1割 | なし | ～2割 |
| G 病院 | その他私的 | 2000以上 | | | |
| H 病院 | 学校法人 | 1200～1399 | | | |
| I 病院 | 社会保険 | 400～ 599 | ～1割 | なし | 23% |
| J 病院 | その他私的 | 1000～1199 | 4割以上 | なし | ～2割 |
| K 病院 | 学校法人 | 400～ 599 | ～1割 | ～2割 | ～8割 |
| L 産院 | 県立 | 1700～1999 | ～1割 | ～2割 | ～8割 |
| M 病院 | 国立（厚） | 1000～1199 | 6% | なし | 4割 |
| N 病院 | 国立（厚） | 299～ 399 | ～1割 | なし | ～5割 |
| O 病院 | 国立（厚） | 100～ 199 | ～1割 | なし | ～2割 |
| P 病院 | 国立（厚） | | | | ～2割 |
| Q 病院 | 国立（文） | 600～ 799 | ～1割 | ～2割 | ～2割 |
| R 母子健康センター | 町立 | 100～ 199 | なし | なし | ～2割 |
| S 母子健康センター | 町立 | 1～ 99 | なし | なし | なし |
| T 助産所 | 私立 | 100～ 199 | なし | なし | なし |
| U 助産所 | 私立 | 200～ 399 | なし | なし | なし |

注）空欄は不明のところ